愛着（アタッチメント）

愛着（アタッチメント）及び愛着障害の概要について把握し、愛着修復のための子どもとの関わり方について指針を得ることを目的とします。

目次

1.愛着とは 2

2.愛着の標準的な発達 3

3.愛着が発達していくプロセス 4

4.愛着スタイルの4類型 5

5.愛着障害とは 6

6.愛着障害の具体的特徴（外に現れる行動） 7

7.愛着障害の三大特徴 8

8.愛着障害の子どもに「してはいけない」対応 9

9.愛着形成のために必要なこと 10

10.愛着修復で大切なこと 11

11.愛着修復支援（ARPRAM ～和歌山大 米澤～） 12

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着とは

Point！
- 愛着とは「特定の人と結ぶ関係」です。
- 「特定の人」とは「親」とは限りません

愛着とは

① 「特定の人と結ぶ情緒的な（こころの）絆」です。

② 「特定の人」とは「親」とは限りません。

③ 愛着関係は「親でなければ結べないもの」ではありません。

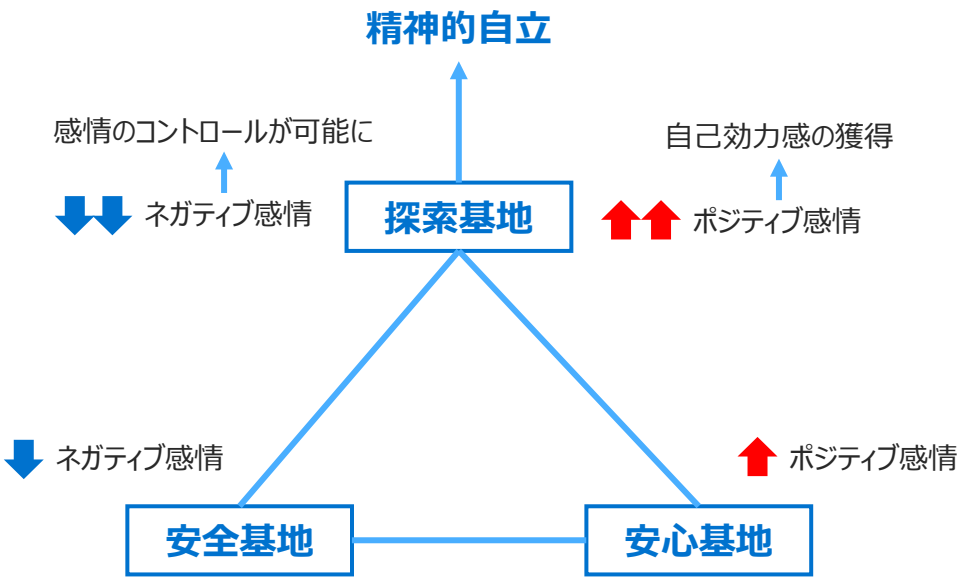
“愛着形成”の3つの機能

- 特定の人と愛着を形成することにより、人は次の3つの基地を得ます

安全基地	• 恐怖や不安、怒り、悲しみなどのネガティブな感情を持ったとき、「特定の人」に守ってもらえるという認知・行動の基地。
安心基地	• 「特定の人」と一緒にいるとき「落ち着くな」「ほっとするな」などのポジティブな感情を生じさせる感情の基地
探索基地	• 「特定の人」から離れ、行動し、その後また「特定の人」にところに帰ってくるという一連の行動。 • 自身の体験を「特定の人」と共有し、受容してもらうことでポジティブな感情は増加し、ネガティブな感情は減少します。

愛着を形成できるとどうなるのか

- ネガティブな感情から守ってくれる「安全基地」とポジティブな感情を生みさしてくれる「安心基地」を土台に、自立活動で生じたポジティブ感情を増やし、ネガティブ感情を減らしてくれる「探索基地」が形成されることで自己効力感と感情コントロールの方法が身につき、精神的自立が可能になります。



（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp8-40

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着の標準的な発達

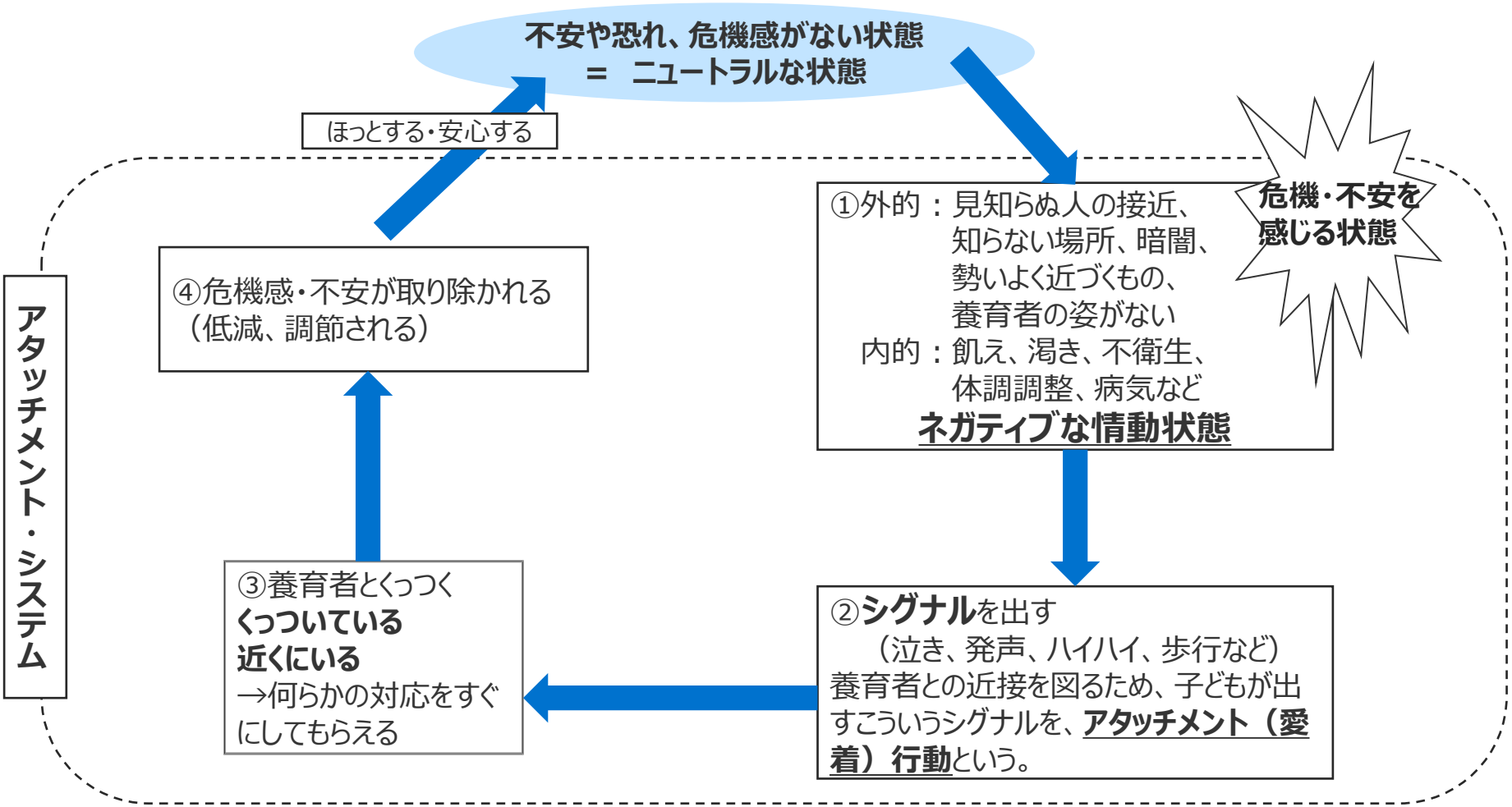
段階	標準的な発達
第1段階 (0~2か月)	• この時期の乳児はまだ、特定の人を選んだり好んだりしないが、生まれた瞬間より、人に関心のある行動をとる。人の顔や声を好む。人とのやり取りを楽しむ。 • 近くにいる人物に対して**定位行動（追視する、声を聴く、手の伸ばすなど）**や、**信号行動（泣く、微笑む、喃語を言う）**といった**アタッチメント行動**を向ける。 • この時期には、相手が誰であれ、人の声を聴いたり、人の顔を見たりすると泣き止むことがよくある。 • また、遊んでくれたり、あやしてもらえたりするときには、体全身を使って喜び、興奮を示す。
第2段階 (2~6か月)	• 第1段階と同様、乳児は誰に対しても友好的に振る舞いやすいが、その一方で日常よく関わってくれる人に対しては、特にアタッチメント行動を向ける。 • 養育者の声や顔に対して微笑んだり、声を出したりする。 • 人物に応じて分化した反応を示す。
(7~12か月ごろ)	• 後追いしたり、再会で喜びを表したり、その人物を中心として探索的な行動をとれるようになったりする。 • その子らしいパターン化された行動となり、好みのアタッチメント対象者が存在する。 • 自分がハイハイや歩行で**移動可能となったことや、言葉が使用できることから、子ども側からアタッチメント対象者を求め、その人との近接を維持できるようになる。**
第3段階 (12~18か月ころ)	• **アタッチメントの個人差がほぼ成立する。**多様な種類の**活発な接触行動が明確**になる。 • アタッチメント対象者との間で安定したアタッチメントが形成されていると、その人を**安心の基地**として利用し、周りの環境や外界に興味を持て、探索が活発になる。 • 見知らぬ人に対してはだんだんと注意深く対応するようになり、危機感を持ったり、逃げたりするようになる。
(1歳半~2歳半)	• 自分と養育者に関する初歩的な認知構造としての、目標修正的な「地図」を持てるようになる。 • アタッチメント対象者は永続的な存在であり、具体的なやり取りから、関係を心に表彰（≒イメージ）することに徐々に移行していく。 • 何が養育者を自分から遠ざける影響を与えるのか、自分がどうすればそれを避けられるのかについての理解が深まる。あるいは、そのようなことは自分ではどうしようもない、理解しがたいことと感じる可能性もある（**内的作業モデル**の形成のはじまり）
第4段階 (2歳半～5歳ころ)	• 養育者の行動を観察することで、設定目的が何であり、それを達成するためにどうしようとしているのかを分かるようになる。このことは、子どもが養育者の感情や動機に対する洞察を獲得したと示唆する。つまり、養育者との間での**「パートナーシップ」状態**に移行したことになる。**話し合うこと、分かち合うこと、交渉することは、目的を獲得するためや人と関係するための手段**となる。 • 情緒的な安定性は、親の利用可能性(availability)を象徴的に表象することによって達成できるので、親が物理的に眼前に存在していなくても大丈夫になっていく。内的作業モデルは5歳で成立する。

（参考）数井 みゆき 編著：アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012,p7より引用

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着が発達していくプロセス

- 愛着は、乳児が感じる「恐れ（不安や危機感）」を下図のようなプロセスで養育者によって調整されることが繰り返されることで発達していきます



（参考）数井 みゆき 編著：アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012,p４より引用

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着スタイルの4類型

- 愛着スタイルには次の4類型があります。子どもに対しては、「安定型の養育における親の特徴」に倣った接し方をするように心がけましょう。

	子どもの特徴	養育における親の特徴
安定型	• 不安なときに養育者などに近接し、不安感を和らげる。 • 養育者を安心の基地として使っている	• 子どもの欲求や状態の変化に敏感であり、子どもの行動を過剰に、あるいは無理に統制しようとすることが少ない。 • 子どもとの相互作用は調和的であり、親もやりとりを楽しんでいることが伺える • 遊びや身体的接触も、子どもに適した快適さでしている。
回避型	• ある程度までの不安感では養育者には近接しない。 • 養育者を安心の基地として使わない。	• 全般的に、子どもの働きかけに対して拒否的に振る舞うことが多いが、特にアタッチメント欲求を出した時にその傾向がある。 • 子どもに微笑んだり、身体的に接触したりすることが少ない。 • 子どもの行動を強く統制しようとする関わりが、相対的に多く見られる
アンビヴァレント型	• 全般的に不安定で用心深く、養育者に執拗に接触していることが多く、安心の基地として離れて探索行動を行うことができない	• 子どもの信号に対する応答性、感受性が相対的に低く、子どもの状態を適切に調整することが不得意である。 • 応答するときもあるし、応答しないときもある。 • 子どもとの間で肯定的なやり取りができるときもあるが、それは子どもの欲求に応じたというよりも、親の気分や都合に合わせたものであることが多い • 結果として応答がずれたり、一貫性を書いたりすることが多くなる。
無秩序・無方向型	• 養育者に怯えているようなそぶりを見競ることもある • 始めて会う人に対して親しげで自然な態度をとることがむしろ少なくない。	• 養育者が、子どもにとって理解不能な行動を突然とることがある。 • 例えば、結果として子どもを直接虐待するような行為であるとか、あるいは、訳の分からない何かに怯えているような行動であるとかする。 • そのような子どもにとって訳のわからない親の行動や様子は、子どもに恐怖感をもたらす。 • そのため、子どもはなすすべがなく、どのように自分が行動をとっていいかわからなくなり、混乱する。

（参考）数井 みゆき 編著：アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012,p8を一部改変

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着障害とは

Point！
- 愛着障害とは、何らかの原因により特定の人との情緒的な絆を結ぶことができなかったために問題を抱えている状態のことをいいます。
- 愛着障害は子どもだけでなく、大人も抱えていることがあります。

愛着障害とは

- 愛着障害とは、何らかの原因により特定の人との情緒的な絆を結ぶことができなかったために問題を抱えている状態のことをいいます。
- 医学的な分類としては以下の2つに分けられます。

反応性アタッチメント障害	• 人に対して過剰に警戒するタイプであり、人にうまく頼ることができない • 他人を信用できない / 恐怖心や警戒心が強い /人の言葉に深く傷つく / 自傷行為がみられる / 嘘をつきやすい / 体調不良を起こしやすい / ちょっとしたことでひどく落ち込む / 自己肯定感が低い / 感情の起伏が少ない / 謝れない といった特徴がある
脱抑制型愛着障害	• 人に対して過度になれなれしいタイプであり、無差別に人に甘えることができる • 誰にでもかまわず抱きつく、なれなれしい / 周りの注意をひくため大声をだす / 人によって態度を変えることはない / 落ち着きがない / 乱暴な言葉がある / わがままな言動をする / 強情で意地悪さがある / 嘘をつきやすい といった特徴がある

反応性アタッチメント障害・脱抑制型愛着障害の子どもの共通特徴

- 左記の異なるタイプの愛着障害の子どもには、次のような共通した特徴があると言われています。
  - 食べる量が少なく、身体が周りより小さい
  - 体調不良を起こしやすい
  - 自分や他人を傷つける
  - 大人を試すような行動をする
  - 理由もなく嘘をつく
  - 睡眠障害や摂食障害がある

(参考)大人の愛着障害

- 乳幼児期に養育者と愛着形成されないまま大人になった場合は、愛着障害の症状がそのまま続いているケースもあります
- また大人の愛着障害は、うつ病、心身症、不安障害などの他の病気を引き起こす可能性もあります。
- なお、大人の愛着障害の特徴はつぎのとおりです。
  - 対人関係がうまくいかない
  - 情緒面が不安定
  - アイデンティティの確立が困難

（参考）大阪メンタルクリニック梅田院　コラム：愛着障害 ,(https://osakamental.com/symptoms/20.html), 2023/2/22閲覧

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着障害の具体的特徴（外に現れる行動）

- 子どもが生活する子育て・保育・教育・福祉の現場で目撃する愛着障害の具体的な特徴として次のものがあります。
- いくつかが確認できる場合、その子どもは愛着の形成に課題があるかもしれません

モノとの関係

さわる必要のないものをさわる、モノに囲まれる

- 鉛筆、消しゴムなど机の上のモノに触る必要がないのに触る
- 顔、髪、手などの身体の一部を触る
- 服やズボンをさわる
- ポケットに手を入れる
- 壁や机を触りながら歩く
- ベッドの周りにモノをいっぱいおいて囲まれて寝たがる

口の問題

さわっていたものを口に入れる

- 鉛筆、消しゴム、机、ハンカチ、服などをなめる
- 舌なめずり、指吸い

床への接触

床に接触感を求める

- 靴や靴下を履くべき場所でも靴下まで脱いで素足になる
- 床に座り込む、寝転ぶ、這い回る、転がりまわる

人への接触

反応性アタッチメント障害型

- 人を警戒する、怖がるなど人との関係を忌避する

脱抑制型

- 誰彼なしに無警戒にかかわりを求める。何歳になっても抱っこ、おんぶ、膝のりなど強い身体接触を求める

姿勢・しぐさ

- 姿勢の保持が難しい
- だらしなく感じる着こなし、季節にあわない着こなしなど服装の乱れ
- 突然飛び上がる、走り出す
- 遺糞、遺尿

危険な行動

- モノを乱暴に扱う、モノを投げる、振り回す
- 身体の一部や衣服を噛む、相手に噛みつく
- 高いところに登る
- 対人への暴力、暴言
- 泣けない

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp60-72

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着障害の三大特徴

- 先に照会したいくつかの行動に加えて、下記のような特徴がみられる場合は愛着障害の可能性が高いと思われます

愛情欲求行動（安心基地機能の不具合）	◆ 注目されたいためのアピール行動 ・ 痛くない怪我でも痛そうにふるまい、手当を要求する ・ わざといたずらをする ・ 誰かのモノを隠す ◆ 愛情試し行動 ・ わざと相手の反応を引き出すようなふるまいをし、これをしても許されるか、叱られるか、叱ると怖いのかを試す。試した後は、人を見て行動を変える。なお、試し行動をされる側に原因があるとは限らない。
自己防衛（安全基地機能の不具合）	・ 愛着障害の三大特徴の中でも最も顕著な特徴 ・ 不適切な行動を指摘されても、絶対に認めない ・ 自分は被害者であり、相手に非があることを主張する。 ・ 不適切な行動についての追求の度が過ぎると解離症状に至る場合がある
自己評価の低さ（探索基地機能の不具合）	◆ 自己否定 ・ 失敗体験ばかりを積んできたため、「どうせできない」と思ってしまう。 ・ 「何をやっても無理」「自分なんて生まれてこなければよかった」という全面的な自己否定になる ◆ 自己高揚 ・ 自己評価が低いことを自分で認められないため、無理に自己評価を上げようとする ・ 自分もできていないのに、他人のできていないところを指摘する ・ モノをあげる ・ ともだちをいじめる

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp73-90

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着障害の子どもに「してはいけない」対応

- 愛着障害の克服を支援していくに当たり、かえって愛着障害を強めてしまうおそれのある対応には次のようなものがあります。
- こうした行動は避けるように配意しましょう

本人に理由や気持ちを尋ねる

- 子どもが不適切な行動をした際の理由や気持ちを尋ねるのはNGです。
- 感情の障害を抱える**愛着障害の子どもは、自分で自分の気持ちが分からないし、相手の気持ちもわからない**ため、これを問い詰められると自己防衛反応を示します。

追い詰めるように叱る対応

- 愛着障害のある子どもを追い詰めるように叱っても防衛反応を示すだけで効果がなく、かえって解離症状や対親暴力、対教師暴力を誘発し得ます。
- 叱る必要がある場面では「〇〇してはダメ」という叱り方ではなく、例えば「走ってはダメ！」ということを叱るなら「歩こう！」というように肯定的表現・前向きな提案の形をとります。

腫れ物にさわるような対応

- 何をしても叱らない、子どもの命令、支配に従うだけといった対応はNGです。
- 愛着障害の子どもは自己高揚が増大し、命令や支配がエスカレートします。
- 相手が命令に従ったとしても、次の命令に従う保証はないので、愛着障害の子どもは安心することができず、命令がエスカレートします

褒めればいい、甘えさせればいいという対応

- 愛情欲求行動がエスカレートしてしまうためNGです。

関わる人の無連携な対応

- 支援者がそれぞれの思いで勝手に関わったり対応するのはNGです
- 愛着障害の子どもは「1対多」の状況では安心感を持って関わることができません。「特定の大人」を決め、「1対1」で関わることができるように連携していくことが必要です。

受容・傾聴・向き合う対応

- 要求を無条件に受け入れる、ひたすら傾聴する、相手の真正面に立ち位置をとって子どもと向き合うのは、感情が育っていない愛着障害の子どもにとってはどのように受け取っていいかわからず混乱するためNGです。
- 愛情欲求行動や支配、命令がエスカレートする恐れがあります

無視する対応・取り上げない対応

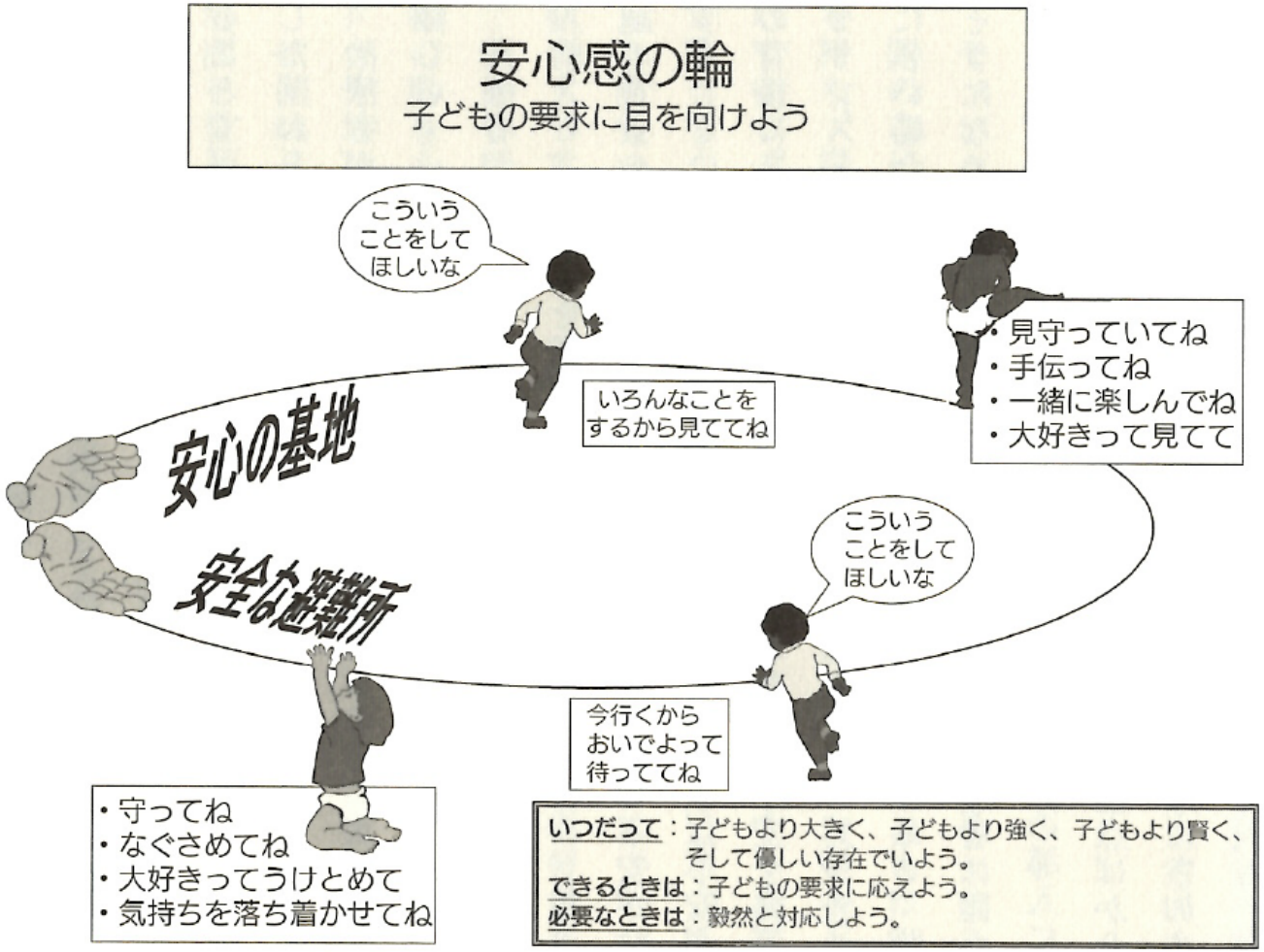
- 愛着障害の子どもは、愛情欲求が無視されたととらえ、余計不適切行動が増えてしまう恐れがあります。

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp128-140

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着形成のために必要なこと

- 愛着形成のためには、子どもの愛着行動に気づき、しっかり受け止め、子どもの気持ちに共感的に寄り添います。
- そして子どもの探索行動について「一緒に楽しんで、見ていて」という欲求を向けてきたときには可能な限り応えて子どもを見守ります。
- この一連の「安心感の輪」に基づく対応を、子どもの愛着形成・修復の基本姿勢として認識してください。



（参考）数井 みゆき 編著：アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012,p27より引用

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着修復で大切なこと

キーパーソン設定	• 「愛着」は「特定の人と結ぶ情緒的な絆」です。 • 1対１としての関係を意識するキーパーソンを設定します
ポジティブな感情を育む	• キーパーソンと子どもが一緒にポジティブな感情が発生するであろう活動に取組みながら、その感情についてラベリング支援を行い、子どもの行動・認知・感情を結び付けます。 • 具体的には、自己有用感→自己効力感→自己肯定感の順に育んでいきます。
安心基地形成	• 上記のような取り組みで育まれたポジティブな感情は、キーパーソンが一緒にいてくれるからだと気づいてもらう（愛着対象の意識化）ことで安心基地となることを目指します。
安全基地形成	• ポジティブな感情にしてくれる人なら、子どもも一緒にいたくなります。 • そこからさらに、そんな人なら、困ったとき、ネガティブな感情になったとき、助けてと頼ることができる、きっと助けてくれる（ネガティブな感情を減じてくれる）と子どもに思ってもらうことで、安全基地を意識してもらいます。
探索基地形成	• 安心基地・安全基地を形成したうえで、キーパーソンによる他者との子どもと他者との橋渡し支援などを通じて精神的自立に向けて支援を進めます

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

- 愛着障害の克服の支援には4つのフェーズがあり、これらを「行きつ戻りつ」実施していきます。
- 子どもの愛着障害の強さや周囲の影響などを考慮して、場合によっては第1・第2フェーズを並行して行う又は第2フェーズを先行して行うこともあります。

フェーズ1

受け止め方の学習支援

- キーパーソン決定と役割分担による、分かりやすい支援体制構築
  （1対１の関係作り→キーパーソンにつなぐ→情報集約）
- 感情ラベリング支援＝感情学習（気持ちに名前をつけ、言い当てる）

フェーズ2

子ども主体で大人主導の働きかけへの応答学習

- 主導権をキーパーソンが握る＝先手支援→個別の作業支援、情報集約
- 役割付与支援＝わかりやすい関係性＝関係意識化・行動の枠組み・報酬感の付与

フェーズ3

他者との関係つくり

- 橋渡し支援：キーパーソンを軸に他者とつなぐ支援
- 見守り支援：寄り添う移動基地（子どもと他者の関わりにおける修正と確認）
- 探索基地化：固定基地（確認後の行動始発と報告、評価）

フェーズ4

自立に向けて次年度に向けて

- 参照ポイントつくり：参照視を参照ポイントに転換し、行動のポイントとして意識化
- 受け渡しの儀式：新・旧キーパーソンと本人の3者立ち合いで実施

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

【詳述】愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

フェーズ1

受け止め方の学習支援

- **キーパーソン決定と役割分担**による、分かりやすい支援体制構築
  （1対１の関係作り→キーパーソンにつなぐ→情報集約）
- 感情ラベリング支援＝感情学習（気持ちに名前をつけ、言い当てる）

キーパーソンの決定

- 愛着は「特定の人」と結ぶ絆ですから、その絆を結ぶ最初の相手である「愛着対象＝キーパーソン」を決めてから支援に当たります。
- キーパーソンの意識なしに誰もが勝手に関わると、刹那的な関わりの快感を求める「愛情のつまみ食い現象」を起こしてしまいます。
- なお、キーパーソンを子どもに決定させることはしません

誰をキーパーソンにするか

- その子どものことを一番知っている人をキーパーソンとします。
- キーパーソンを子どもに決定させることはしません
- キーパーソンは子どもにとって「自分のことを誰よりも知っていて、分かってくれる人」となることで、子どもにとっての安心基地機能を担います。

キーパーソン以外の役割

- 子どもからかかわりを求められたとき、キーパーソンが入れば「それは〇〇さん（キーパーソン）としよう」と言ってキーパーソンにつなぎます。
- キーパーソンがいない場合は、子どもと関わった後、子どもと一緒にキーパーソンに報告します。（子どもが大きい場合は一緒でなくてもよい）
- 当事者に関わる全ての情報をキーパーソンに共有し集約します。
- まわりの人がその子を叱ったりしたときは、すぐにキーパーソンのところに連れて行って、慰めてもらい、安全基地の代わりをしてもらいます。
- なお、これらの報告行動は、その子に最終的に身に付けてほしい「探索基地」の例示、モデルになります

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

【詳述】愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

フェーズ1

受け止め方の学習支援

- キーパーソン決定と役割分担による、分かりやすい支援体制構築
  （1対１の関係作り→キーパーソンにつなぐ→情報集約）
- **感情ラベリング支援＝感情学習**（気持ちに名前をつけ、言い当てる）

1対１で一緒の活動をする

- キーパーソンの大切な役割は、感情がきちんと育っていない愛着障害のこどもの感情を育むことです。
- 感情は1人では気づけないことが多いため、誰かと一緒に何かをして、その時に感じたことを一緒に共有することで感情の存在に気づきます。
- 以上を踏まえ、キーパーソンは当事者と1対1で、勝ち負けがなく、その子がしてみたい好きな作業で「同じ方向を向く」「触る（接触感のある活動）」「作る（関与間のある活動）」「できる（成就感を一緒に味わえる活動）」（例：工作、お絵かき、掃除など）を一緒に行います。

感情ラベリング支援＝感情学習

- キーパーソンとの1対１の活動を通じて、「同じことをした」（行動）と「同じことが起こった」（認知）を確認し（行動と認知の共有）、そこで「お互い同じ気持ちになった」（感情）ことを確認できる状況が生じるため、行動・認知・感情の連合学習＝感情学習が可能となります。
- 一緒の活動を通じて「〇〇して楽しいね！」「私は楽しいけど、あなたも楽しいね！」といった具合に、子どもの感情を言い当てます。「違う」と言われても「ちょっと違うよね～、少し楽しいくらいだね」と全否定されないように収めます。
- また、キーパーソン側の感情反応を一定にすることが重要です。例えば一緒に絵をかいて大人は最初はとても喜んでくれたのに、次回また同じように絵を持っていくと「今忙しいからあとで」というような異なる反応をすると愛着形成に悪い影響を与えます。これを踏まえると、最初から過剰な反応はしないようにした方が後の支援がスムーズです。

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

【詳述】愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

フェーズ2

子ども主体で大人主導の働きかけへの応答学習

- **主導権をキーパーソンが握る**＝先手支援→個別の作業支援、情報集約
- 役割付与支援＝わかりやすい関係性＝関係意識化・行動の枠組み・報酬感の付与

主導権を握る＝先手支援

- 子どもが要求したことにそのまま応答するだけでは「愛情欲求エスカレート現象」を生むのみで意味がありません。自分が仕掛けたことに後から反応されても自分が期待したほどの反応でなければ嫌な気持ちになる一方、思い通り反応された自分がそう仕向けたと思われるからです。
- そのため、「これしよう」とキーパーソンが先手、主導権をとって、一緒の活動に子どもを誘うことが大切です。それが子どものしたいことと一致していれば、自分から要求してからそれをするよりも嬉しく、「わかってくれた」と実感し安心するためです。
- なお、ここで言う主導権とは、子どもがやりたくもないことを無理やりやらせる、言うとおりに子ども支配する、子どもが嫌がるキーパーソンを押し付けるという意味ではないことに十分注意が必要です。

主導権を維持する「叱り方」

- 愛着障害のある子どもを追い詰めるように叱っても防衛反応を示すだけで効果がなく、かえって解離症状や対親暴力、対教師暴力を誘発し得ます。
- ただし、叱らないことも自己高揚を増長させ、愛着修復にはマイナスになります。そのため、叱る必要がある場面では「〇〇してはダメ」という叱り方ではなく、例えば「走ってはダメ！」ということを叱るなら「歩こう！」というように肯定的表現・前向きな提案の形をとります。そしてその提案のとおり行動できたら褒めるとともに、お互い嬉しい気持ちになったことを確認します。

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

【詳述】愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

フェーズ2

子ども主体で大人主導の働きかけへの応答学習

- 主導権をキーパーソンが握る＝先手支援→個別の作業支援、情報集約
- **役割付与支援**＝わかりやすい関係性＝関係意識化・行動の枠組み・報酬感の付与

役割付与＝「行動の枠組み」の提供

- 役割付与により、役割遂行を通じて自己有用感（他者の役に立つ）を報酬として得られるようにして愛着の絆形成を促進します。
- 役割はキーパーソンから付与することで、キーパーソンと子どもの「関係意識化」を促進するとともに、その役割が子どもにとっての居心地のいい場所、安心基地となることを狙います。
- 付与する役割は色々な活動がその中に混在しているより、1つに限定されたものとすることで、「役割を果たせた」ことが認識しやすいものとすることが効果的です。キーパーソンと同じことをするということでも良いでしょう。
- 役割を達成できたら、キーパーソンから褒められる、認められることが嬉しいという報酬感を与えられるように意識します。

報酬感を与える「褒め方」

- 子どもの要求に応じて褒めることはしません
- 同時に2つ以上のことを褒めることはしません。何が褒められたのか分かりにくいからです。（例：黙って座って漢字書いてたね、えらいね）
- 褒める場合はすぐに褒めます。あとから褒めるのは何が褒められているのかわかりにくいからです（例：さっき静かにしてて偉かったね）
- ポジティブな感情と結びつけて褒めます。（例：大きな声で歌えたね、元気に歌えると嬉しくなるね。これが「やった！」っておもいだよ）
- 小学校低学年までは具体的行動を言語化して褒め、意識化します
- 小学校中学年には、気持ち・感情を言語化して、代替行動を示し、それができたら褒めます（不適切行動の支援時）
- 小学校高学年・思春期の子どもには、可能性を見出して褒めます
- 中学生・高校生はこれまでとの変化・違いを褒めます

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

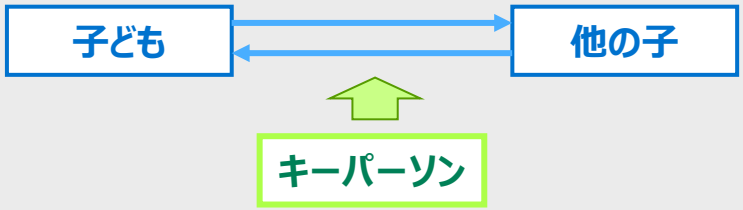
フェーズ3

他者との関係つくり

- 橋渡し支援：キーパーソンを軸に他者とつなぐ支援
- 見守り支援：寄り添う移動基地（子どもと他者の関わりにおける修正と確認）
- 探索基地化：固定基地（確認後の行動始発と報告、評価）

橋渡し支援・見守り支援による人間関係を広げる支援

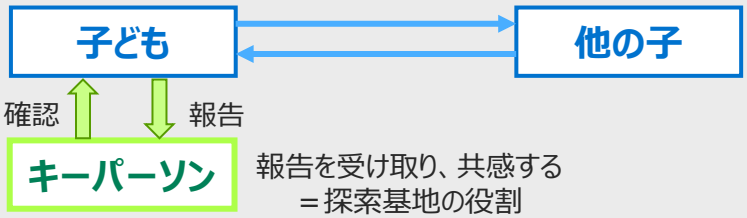
- 定型発達では、特定の人と作った絆を基に人間関係が広がりますが、愛着障害の場合は、愛着の絆がないために人間関係を広げていくのが難しいため、キーパーソンが子どもと他の人との関係作りの「橋渡し支援」をする必要があります。
- 本人の意図、感情・他者の意図、感情を通訳するとともに、適宜子どもの他者との関りにおける行動の修正を手助けします。



三者で遊ぶ（通訳、歯止め、見守り）
＝安全基地、安心基地の役割

探索基地化

- 右図のような関係が出来上がると、愛着が形成できたと考えてもよさそうです。



報告を受け取り、共感する
＝探索基地の役割

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

愛着修復支援（ARPRAM　～和歌山大 米澤～）

フェーズ4

自立に向けて
次年度に向けて

- 参照ポイントつくり：参照視を参照ポイントに転換し、行動のポイントとして意識化
- 受け渡しの儀式：新・旧キーパーソンと本人の3者立ち合いで実施

参照ポイントづくり

- 探索基地ができると、何か行動を起こそうと安全基地・安心基地から離れる際に「（行って・して）いいよね？」と確認する“参照視”が発生します。
- 参照視は「99%～しよう」と自分で決めているが、最後の１%の「していいか」を確認して背中を押してもらおうとする行為です。
- 精神的自立を促してもよさそうなタイミングが来たら、この１%を自分で判断できるように（参照視→参照ポイントの変換）仕向けていきます。

受け渡しの儀式＝キーパーソンの引継ぎ

- 職員の異動や子どもの措置変更に応じて、キーパーソンの交代の必要が生じます。この際、新旧キーパーソンと子どもを交えた3者での「受け渡しの儀式」をしっかり行うことが重要です。
- 旧キーパーソンは新キーパーソンを「信頼できる人」と伝え、旧キーパーソンとの約束、できたことを新キーパーソンに子どもの前で伝えます。この際旧キーパーソンへの子どもの「参照視」、新キーパーソンへの「期待視」が生じることを確認します。
- キーパーソンの引継ぎによって、愛着形成を1人から広げ、もって子どもの安心・安全の世界を広げ、本人の自立につなげていきます。

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

（参考）愛着障害と発達障害を併せ持つ際の意識すべき特徴

ADHD **（注意欠如多動性障害）**	• 振り返り困難（「何したの？」という支援はNG） • 抑制制御の困難（「～しちゃダメ」という支援はNG） • 遅延報酬の嫌悪（「あとで」という支援はNG）
ASD **（自閉症スペクトラム障害）**	• 認知の偏り[こだわり・知覚異常]（「それはダメと否定」する支援はNG） • 自己認知・対人認知の困難さ（「自分でわかるでしょ」という支援はNG） • 感情認知の問題（「気持ちわかるでしょ」という支援はNG）
AD **（愛着障害）**	• 感情発達の問題（感情コントロールの困難さ・意欲の問題） • 関係性の問題（対人関係の問題）

（参考）米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022,pp147-181

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.

参考文献

- 米澤 好史：愛着障害は何歳からでも必ず修復できる.合同出版.2022
- 数井 みゆき 編著：アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告.誠信書房.2012
- 大阪メンタルクリニック梅田院
  コラム：愛着障害 ,(https://osakamental.com/symptoms/20.html), 2023/2/22閲覧

Copyright (C) 2022 The Japan Research Institute, Limited. All Rights Reserved.